

代わりに給料は高くただ私自身も、組合員にも、病氣、怪我にはいつも十分の注意を払いました。

今はお陰で家も何度が建て替え、田も三反半余りを購入して、約一町歩の耕作をしています。

真面目に過して来た三十年の汗の結晶により今日の平穩な家庭があると感謝しております。幸い子供、孫達と後継者にも恵まれて幸せに家内共々健康で過しております。

海軍軍属としてウエーク島勤務

山形県 舟山 一英

私は大正七（一九一八）年十一月、山形県豊原村（後に合併して飯豊町）の農家に生まれ、姉一人、弟六人、妹三人の男七人女三人兄弟の長男でした。下の妹は二歳でこの世を去り、他の兄弟は現在、男六人、女一人が健在ですから両親と祖父母を合わせて十四人の大家族でした。

私が小学校五年生のころ、祖母が病氣になり、毎日学校を早引きして祖母をリヤカーに乗せて往復二十キロもある医院へ通院するのが日課でした。それが二年ぐらい続いたでしょうか、祖母は全快し、私は小学校を何とか卒業しました。父親も病弱でしたので、その年は母親と二人で農業をやりました。

翌年、東京四谷の仏具店に奉公に出ました。三年、五年と経ったころ店に納入される仏壇や神棚

を作る職人の家に出入している内に、その技術を見よう見まねで覚えて、自分で作って店に置くと、客が喜んで買って行くようになりました。

昭和十五（一九四〇）年一月、教育召集令状が来たので急いで帰郷し、山形北部第十八部隊上林隊重機関銃隊に入隊しました。軍人精神から重機関銃の操作などの教育を受けて、三カ月で教育召集が解除となり実家に帰りました。そこで再び東京の仏具店に戻り、神棚作りなどに懸命に働いておりました。

昭和十六年四月、親の勧めにより帰郷し、北海道の日露漁業の季節労務者となり、千島列島幌筵島へ鮭鱒とりに従事しました。

島の広さは山形県の二倍半の面積だそうです。浜から沖へ約二キロの地点に定置網を設置して魚の入るのを待つのですが、処理し切れないほどの大漁が何日も続きました。鮭は百二十尾で一石、鱒は百六十尾で一石と教えられましたが、一万石祝いは何回もやったことか、本当に宝の島でした。

現在は残念ながらロシア領となっています。

九月末に定置網漁も終わって帰郷し農業を手伝っていますと、職業安定所から呼び出され「軍属として務めてくれ。さもないと徴用令を発動するぞ」などと驚かされて、止むなくそれに応じることにしました。

そして私は海軍軍属として、弟は陸軍軍属として、兄弟で軍属を志願、と山形新聞に掲載され、気分を良くして申し込みました。そして昭和十七年三月、東京豊洲の海軍設営部隊へ入隊しました。

四月十三日、東京芝浦港から日本郵船「浅間丸」に海軍の軍人と共に乗船して、一路南下しました。行く先は我々には知らされていませんでしたが、着いた所は日本名で「大島島」、米国領のウエーク島でした。

この島は三つの小島からなっていて我々が上陸したのは一番大きい本島でしたが、四キロ四方もあろうか、米軍が造った三棟のがつしりした宿舎がありました。そしてその入口から約二十五メー

トルの所に防空壕があつて、後日米軍機の空襲の際には良く利用することになりました。

三棟のうち一棟は守備隊本部、一棟は我々軍属の宿舎、残りの一棟は俘虜の収容施設として米軍約百人が俘虜として収容されていました。米軍の本部はクエゼリン島にあつたそうですが、それも日本軍が占領して進駐しているとのことでした。

我々の任務は飛行場の側溝造りなどが主な任務で、毎日照りつける太陽の暑さに加えて、飛行場のコンクリートから照り返す暑さで、裸で働いてもどうにもならない暑さでした。時々涼を求めて浜辺へ行き、海に入って蛸をとることを覚えまして。

太さ十二ミリの鉄筋を一メートル五十センチぐらいに切つて、鍛冶屋で先を砥いで槍を作り、それを持って海へ行き、石の間に隠れている蛸を見つけて突いて獲るのです。蛸は岩に吸いついて、引つ張つても取れないが、一寸緩めてから、直ぐ引つ張ると簡単に取れます。このコツを覚えると

面白くてやみつきになるくらいでした。

岩の間には鯛などもおり、良くとつて食べました。野菜不足、特にビタミンBが不足すると脚気になり、重くなると心不全を起しかねないので、軍医殿から「ねずみの食べる草は全部食べられる」と教えられて、これをたくさん採つて煮て食べました。郷里の畑に生えているヒヨウと言う草に似ています。またアカザと言う草も沢山採つて食べましたので、脚気患者は一人も出ませんでした。

軍属は第一班が大工、左官、石工、鍛冶職などの職人組で、第二班は土工が主で、それぞれ二十四人程度の人員でした。私は大工で、一班の班長に任命されましたが、軍隊教育を受けていると言うことで、軍装して銃に実弾を込めて俘虜収容棟の監視や警備をよくさせられました。が軍属なのか兵隊なのかと自問しながら勤務していました。

ある日突然、体調をくずして医務室で診断を受けますとアメーバ赤痢と診断され、治療を受けたのですがなかなか良くなりませんでした。宮城県

の白石町から佐藤勝美君と弟の守君の兄弟も志願して来ていました。兄の勝美君は大工で私の班でしたが、弟の守君は医務隊勤務で薬局に勤務しており、良い薬を持って来てくれたために二、三日で全快しました。

こうして医務室と仲良くなりましたので、軍医殿から軍刀の鞘を作ってくれと言われ、クエゼリン島から材料になる木を取って来て作りましたら大変喜ばれました。器用な大工だと言うことで、守備隊長室の棚を造るなどして将校たちから重宝がられました。

昭和十八年の何月ごろか忘れましたが、物資補給船が来なくなり、米軍の偵察機が飛んで来るようになりました。また夜間になると艦砲射撃があったり、次第に緊張する状況になってきました。そのうちに米軍機の爆撃があり、防空壕へ逃げましたが、米軍の作った防空壕はがっちりしていて安心して入っておれました。

度々の爆撃があつて、守備隊長は「もしかする

と米軍が上陸して来るかも知れない。その時は俘虜を殺して玉砕だ」と言っていました。米軍の潜水艦から逃れたのか日本の艦船が砂浜近くで傾いていて潜水艦からの魚雷が命中して沈没するのを見ましたが、どうすることも出来ませんでした。

昭和十八年末に仮装空母が入港して来ましたので、その荷役作業に出ました。そして昭和十九年の元旦に「舟山、直ぐ作業をやめて船に乗れ、そして内地へ帰れ」と言われ、「私物も誰かが船に運ぶから直ぐ乗船しろ。間もなく出港するぞ」とのことので急いで乗船しました。乗船名簿に名前を記入している時に出航となりました。本当に間一髪でした。

乗った仮装母艦は駆逐艦二隻に両側を護衛されて一路日本へ向けて航行しました。軍艦なので船足も早く、一月九日には江田島へ到着、上陸しました。上陸しましたが寒くて何も出来ない。真夏の島から、いきなり真冬の東京へ帰って来たのです。それで冬物の下着や服を買って以前勤めてい

た四谷の店でいったん落ちついてから、一月二十三日、東京豊洲の海軍設営隊へ出向き、軍属解除の手續をして山形へ帰郷しました。

そのころの東京は食料難で、元の店には住み込めないので米沢市の加藤木工製作所へ就職、毎日一時間ほどの汽車通勤で務めました。

昭和十九年七月二日、二回目の防衛召集令が来て仙台通信隊へ入隊しました。そして仙台市も空襲で焼け出され、宿舎も私物も一緒に焼かれました。私たちは空襲の都度麦畑へ走って逃げておりました。無防備の我々は安全な所へ逃げて空襲を見ているだけでした。

何日か焼け跡の片づけに動員されました。仙台に約四カ月いて、こんどは中隊長以下約五十人で佐賀県にあった佐賀通信隊本部へ行き毎日防空壕の中で無線通信の教育を受けました。

さらに昭和二十年八月上旬には岐阜県養老郡上里村へ移動して、通信機や通信施設の防衛に従事していました。夜は小学校で無線通信の教育を受

けましたが蚊が多くて閉口しました。

八月の何日か、部隊にあった三八式の歩兵銃の菊の御紋章を全部グライNDERで削り取る作業をさせられました。その後、犬山村へ移動して毎日通信機の監視をさせられましたが退屈なので、願ひ出て炊事係へ回してもらいました。

炊事係と言っても野菜や食材の買い出しで、農家へ行ってもなかなか売ってくれないので大変でした。豆や小豆とくにコンニャク粉などは豊富にありましたので、物々交換で手に入れました。ある日、班長が子牛を一頭農家から買って来ました。裏山で密殺して、その後は毎日牛肉付きの食事となり全員満足しました。

かくしているある日、班長から「戦争はとうに終わったのだ。日本は負けたのだ」と教えられ、成るほどこのごろ米軍機が飛んで来ないわけだと分かりました。それから数日して召集解除となり、犬山駅から汽車に乗って上野駅へ行きましたが、当時の汽車は石炭で走るので、トンネルに入ると

ガラスの無い窓から煙が入り顔が黒くなる有様でした。

乗客は長年の戦争で衣服も粗末な姿で、全く敗戦国の国民の姿でした。上野で乗り換えて山形の実家へ帰ったのは昭和二十年十月二日でした。早速翌日から稲刈りなど秋の取り入れで多忙でしたが、空襲の心配も無く、安心して働けると、本当に平和の有り難さを実感しました。

私たちは男兄弟四人が出征して、私が復員した時は三男が復員しておりましたが、次男は翌二十一年の五月、四男は二十二年の九月にシベリアから復員して来ました。四人共無事に復員したので両親は大喜びでした。

私も数年前に老妻を亡くしましたが、子供夫婦と孫たちと楽しく余生を生きております。平和な時代に感謝しながら。